山口県玖珂郡周東町埋蔵文化財調査報告 第２集

用田古墳群

―方形台状墓群の発掘調査―

1991

周東町教育委員会

山口県玖珂郡周東町埋蔵文化財調査報告 第２集

用田古墳群

―方形台状墓群の発掘調査―

1991

周東町教育委員会

表紙デザイン/村岡真樹

序

本町では、自然の豊かさと心にふれあう調和と活力のあるまちづくりをめざして、平成元年度に基本構想を策定しました。文化体育総合センターは、その施設の一環で、文化・スポーツを通じて町民および町内外の人々の交流を目的として建設されたものであります。

用田古墳群はその建設予定地内に所在する5世紀代の墓域です。周東町教育委員会はこの遺跡について山口県教育委員会と協議を重ね、記録保存のための発掘調査を実施しました。その結果、方形台状墓4基を確認し、また、その副葬品として鉄剣や土師器などに加えて県内でもきわめて珍しい把手付椀が出土いたしました。

本書はこの発掘調査の記録であり、これが文化財に対する認識と理解のため、また教育ならびに学術のために大いに活用されることを期待します。

なお、発掘調査の実施並びに本書の作成は、山口県教育委員会にお願いしたものであり、ここに関係各位のご尽力に対し深甚の謝意を表するものであります。

平成3年3月

周東町教育委員会教育長　河口　正人

例　言

1　本書は周東町文化体育総合センターの建設に先立って、周東町教育委員会が平成元年度に実施した、玖珂郡周東町大字用田所在の用田古墳群の発掘調査報告である。

2　発掘調査の実施にあたっては、山口県埋蔵文化財センターに職員の派遣を依頼し、技術援助を得、周東町企画課並びに地元関係各位から協力・援助を受けた。

3　調査組織は次のとおりである。

調査主体	周東町教育委員会	（教育長	河口　正人）
事務局	周東町教育委員会社会教育課	（課長	神足　精也）
		（係長	河口　信雄）
調査員	山口県埋蔵文化財センター	指導主事	阿字雄　徹
	同	同	村岡　真樹

〔援助〕　山口県埋蔵文化財センター職員

4　調査期間中は、山口県埋蔵文化財センター主任乗安和二三氏、山口県立岩陽高等学校教諭谷口哲一氏の応援を受けた。

5　出土した把手付椀については、名古屋学院大学文学部教授楢崎彰一氏の御教示を得た。記して謝意を表わす。

6　石材の鑑定については、山口県立博物館専門学芸員橋本恭一氏の御教示を得た。記して謝意を表わす。

7　本書で使用した方位は国土座標（第３座標系）で標示したが、第３図～第10図は磁北による。なお、レベルは海抜標高で標示した。

8　本書で使用した地形図（第１図）は国土地理院発行50,000分の１の地形図「岩国」を使用したものである。

9　本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

ＳＫ；土壙　ＳＸ；段状遺構

10　本書に収録した実測図・写真の作成は、村岡、阿字雄が分担して行ない、執筆・編集は阿字雄が行なった。

本文目次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……1

Ⅱ　調査の経緯……2

Ⅲ　調査の成果……5

1．1号墳……5
2．2号墳……6
3．3号墳……8
4．4号墳……9
5．その他の遺構・遺物……11

Ⅳ　まとめ……14

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
第２図　調査区設定図……2
第３図　遺構配置図……3・4
第４図　１号墳実測図……5
第５図　１号墳出土遺物実測図……6
第６図　２号墳実測図……7
第７図　２号墳出土遺物実測図……8
第８図　３号墳実測図……9
第９図　３号墳出土遺物実測図……10
第10図　４号墳実測図……11
第11図　土壙実測図……12
第12図　土壙出土遺物実測図……12
第13図　出土遺物実測図……13

図版目次

図版第１　調査地遠景（北から）
調査前風景（北東から）
図版第２　１号墳完掘（南西から）
１号墳主体部完掘
２号墳完掘（南西から）
２号墳主体部完掘
図版第３　２号墳周溝内土師器出状
３号墳完掘（西から）
３号墳周溝内把手付椀出状
３号墳周溝内鉇出状
図版第４　３号墳主体部完掘
３号墳主体部内鉄剣出状
土壙内弥生土器（甕）出状
土壙内弥生土器（壷）出状
図版第５　出土遺物(1)
図版第６　出土遺物(2)

調査地遠景（北から）

調査前風景（北東から）

図版第 2

1 号墳主体部完掘

2 号墳主体部完掘

1 号墳完掘（南西から）

2 号墳完掘（南西から）

2号墳周溝内土師器出状

3号墳完掘（西から）

3号墳周溝内把手付椀出状

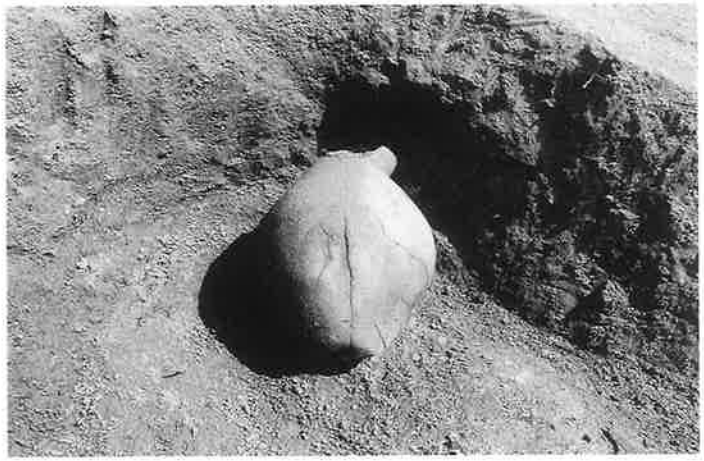
3号墳鉇出状

図版第3

3号墳主体部完掘

3号墳主体部内鉄剣出状

土壙内弥生土器(甕)出状



土壙内弥生土器(壺)出状

1

22

21

23

9

8

10

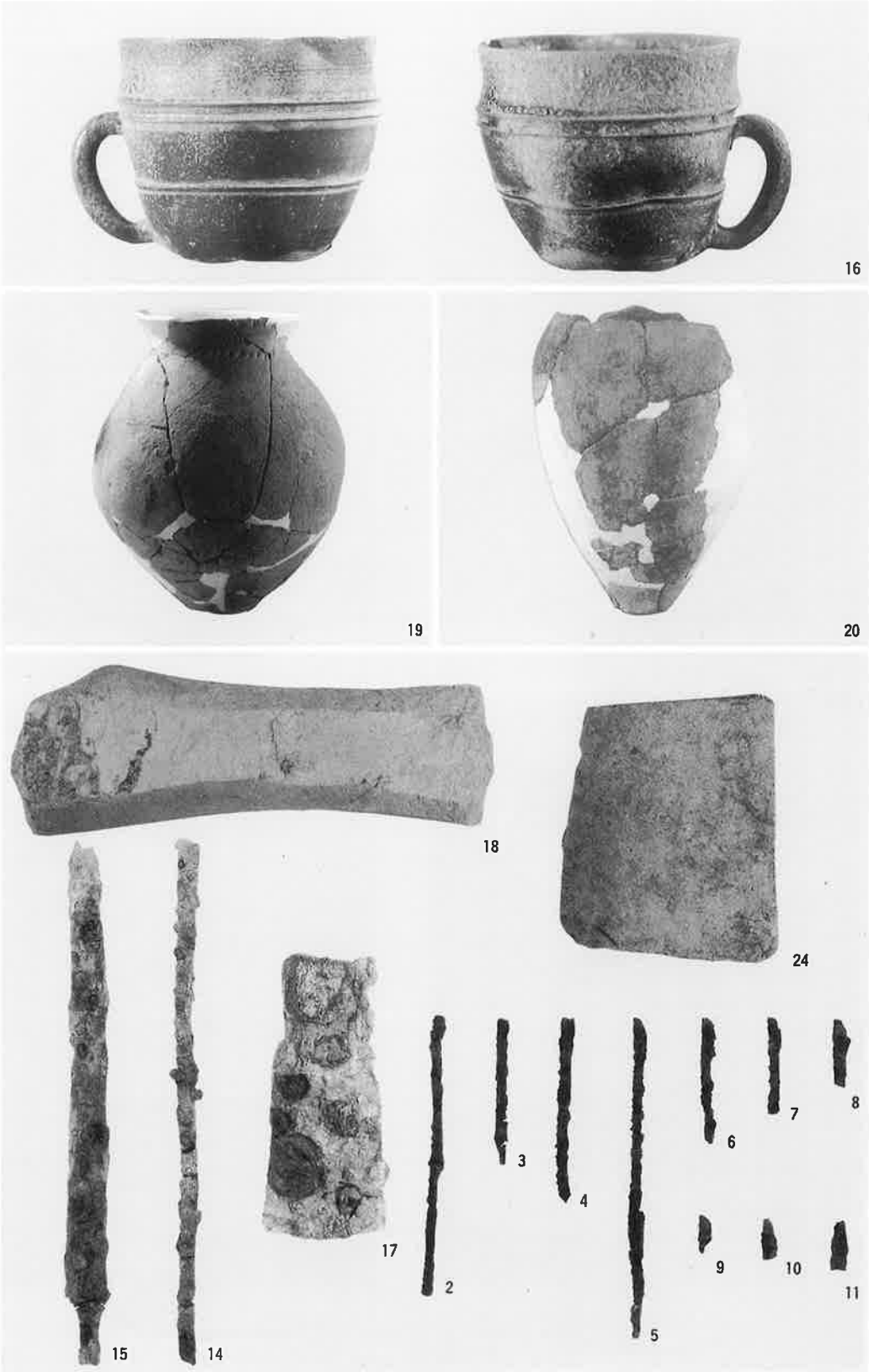
11

12

13

出土遺物 (1)

図版第 6



出土遺物 (2)

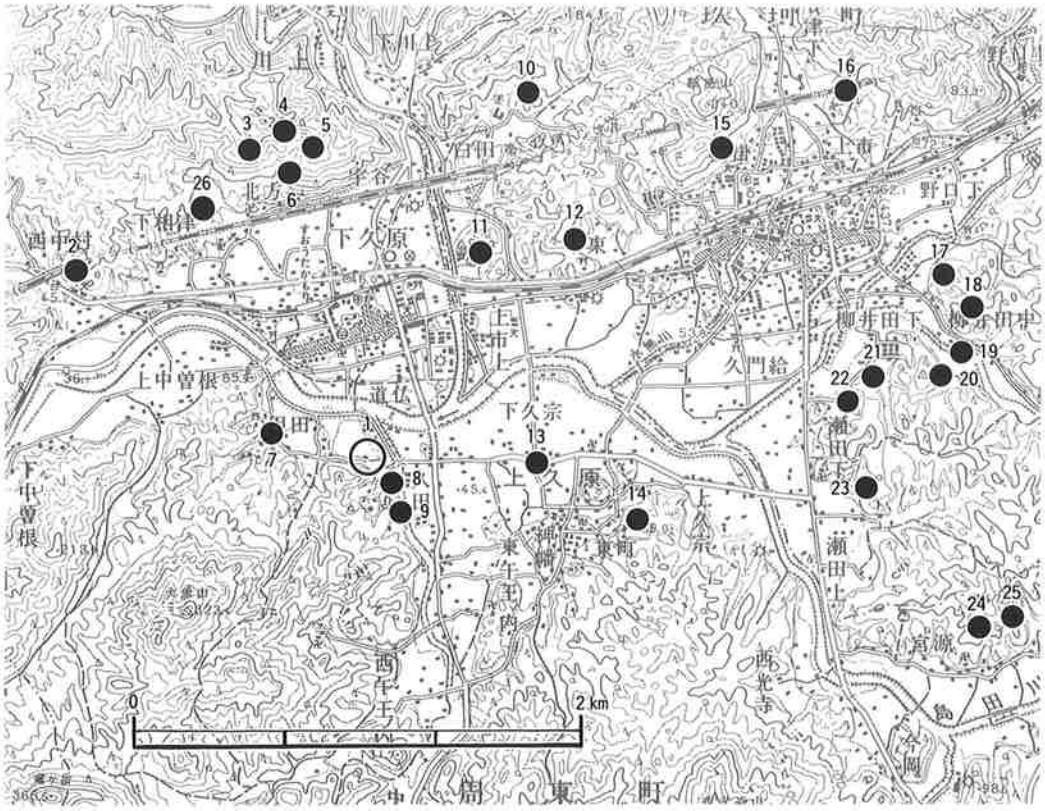
Ⅰ　遺跡の位置と環境

用田古墳群は、玖珂郡周東町大字用田字永安に所在する。この遺跡は玖珂盆地の南西山麓にそびえる大黒山の北に張り出した標高77ｍの丘陵に立地する、古墳時代中期の墳墓群である。周辺は水田地帯で、その比高差はおよそ25ｍである。

玖珂盆地は、島田川の上流域に発達した沖積平野で、その西部は周防内陸部の主要な盆地として古くから居住の場として利用されてきた。盆地周辺の微高地は遺跡の分布もかなり多い。当遺跡のすぐ西側には用田遺跡がある。この遺跡の遺物包含層からは押型文・条痕文・刺突文などを施した縄文土器の破片の他に、有茎の大型石鏃を含む20個以上の石鏃が見つかっており、縄文早期から前期および後期・晩期に居住の場となっていたことがうかがえる。

弥生時代に入ると遺跡は数を増し、筏山遺跡、河池遺跡、平畑遺跡、白山遺跡などが確認されている。このうち河池遺跡は弥生時代中期の集落で、昭和53年に緊急調査、62年に発掘調査が行なわれ、竪穴住居跡・貯蔵用竪穴・土壙などの遺構の中から、櫛描き波状文や凸線文を施した弥生土器や把手付容器などが出土した。

古墳時代中期の遺跡としては竪穴式石室をもつ筏山古墳、同時代の集落として臼田遺跡・原



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

① 用田古墳群　② 中村遺跡　③ 白山遺跡　④ 大浴遺跡　⑤ 大元古墳　⑥ 北方古墳　⑦ 用田遺跡　⑧ 久田遺跡
⑨ 西午王ノ内遺跡　⑩ 臼田古墳　⑪ 筏山遺跡、筏山古墳　⑫ 千束遺跡　⑬ 陳ケ原遺跡　⑭ 河池遺跡　⑮ 植山遺跡
⑯ 大伴遺跡　⑰ へころがき遺跡　⑱ 樋面古墳　⑲ 柳井田遺跡　⑳ 清水遺跡　㉑ 上殿古墳　㉒ 畑岡遺跡
㉓ 瀬田古墳　㉔ 上丈遺跡　㉕ 宮源遺跡　㉖ 原畠遺跡

畠遺跡がある。筏山古墳は現在の県立高森高等学校の地にあり、その上下層に経塚、前述した弥生の遺構を挾む３時期の重複したものである。その石室は床面に円礫を敷きつめ、東北東向きに伸展の遺骸が埋葬されており、石室の構造は箱式石棺と畿内の竪穴式石室の築造技法の折衷様式と考えられている。

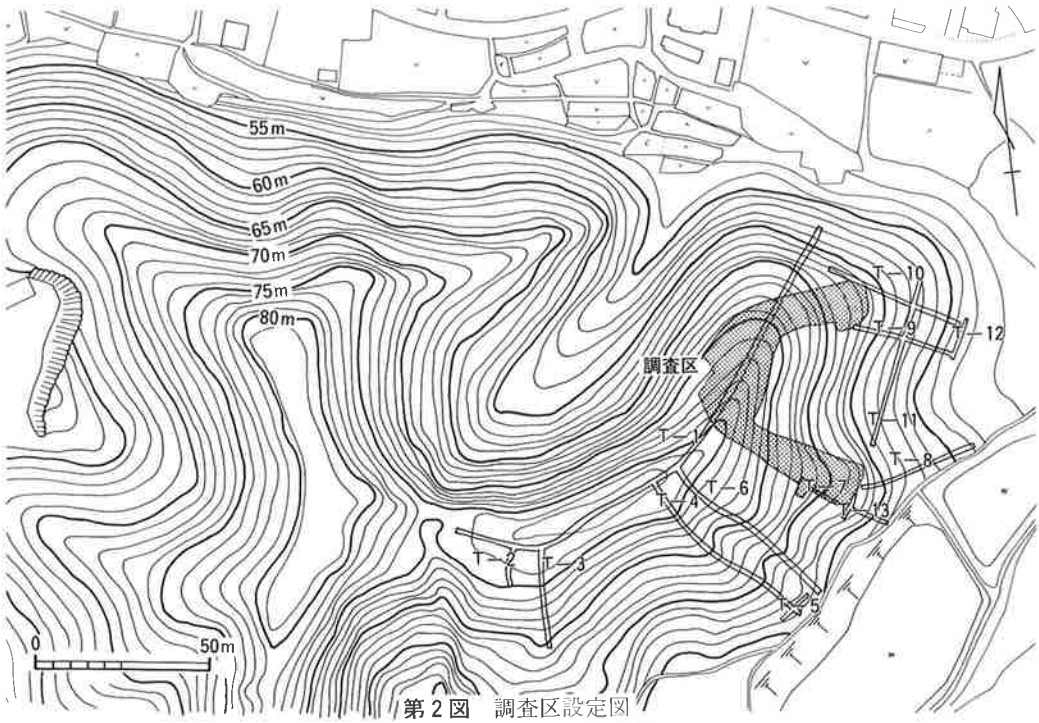
後期になると古墳の数は増加するがその代表的なものは、周東町高森駅の北西山麓にある北方古墳であろう。床面に礫を敷きつめた横穴式石室をもち、その床面の残存状況から木棺を使用していたことがうかがえる。副葬品としては耳環３対、須恵器、鉄刀、刀子・鉄鏃や馬具、それにガラス製の勾玉と小玉が出土している。

このように、この盆地西部は縄文早期から人々の居住の場となり、その後弥生時代から古墳時代を経ることによって生活の基盤を固めていったことがわかるのである。

Ⅱ　調査の経緯

周東は平成元年度に基本構想を策定し、まちづくり施策の推進を図ってきた。今回の文化体育総合センター建設もその一環として計画され、平成元年夏に基礎工事に入ることとなった。その際、周東町は山口県教育委員会に対し建設予定地内の分布調査を依頼し、県は同年７月13、14の両日にわたって現地の分布調査を実施した。調査はあらかじめ山野を伐採し、重機による表土除去およびトレンチ掘りを行なったがその結果、須恵器・土師器片を含む円形土壙および溝状遺構、さらには山の斜面の人工的削平を確認し、当地に遺跡が内包されていることがわかり、発掘調査を実施することになった。

調査は、山口県埋蔵文化財センターが周東町教育委員会の依頼を受けて８月７日から実施し



第２図　調査区設定図

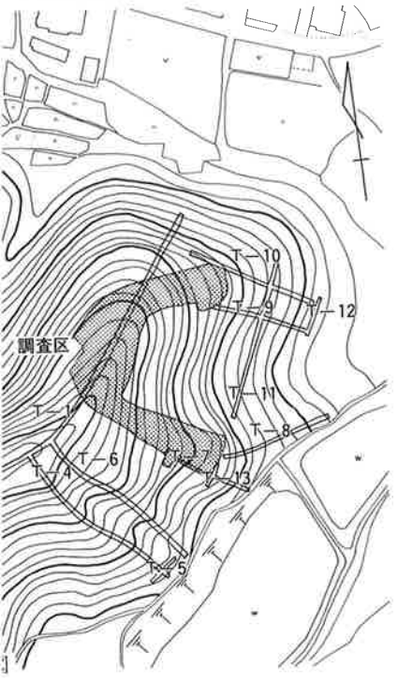
あり、その上下層に経塚、前述した
は床面に円礫を敷きつめ、東北東向
と畿内の竪穴式石室の築造技法の折

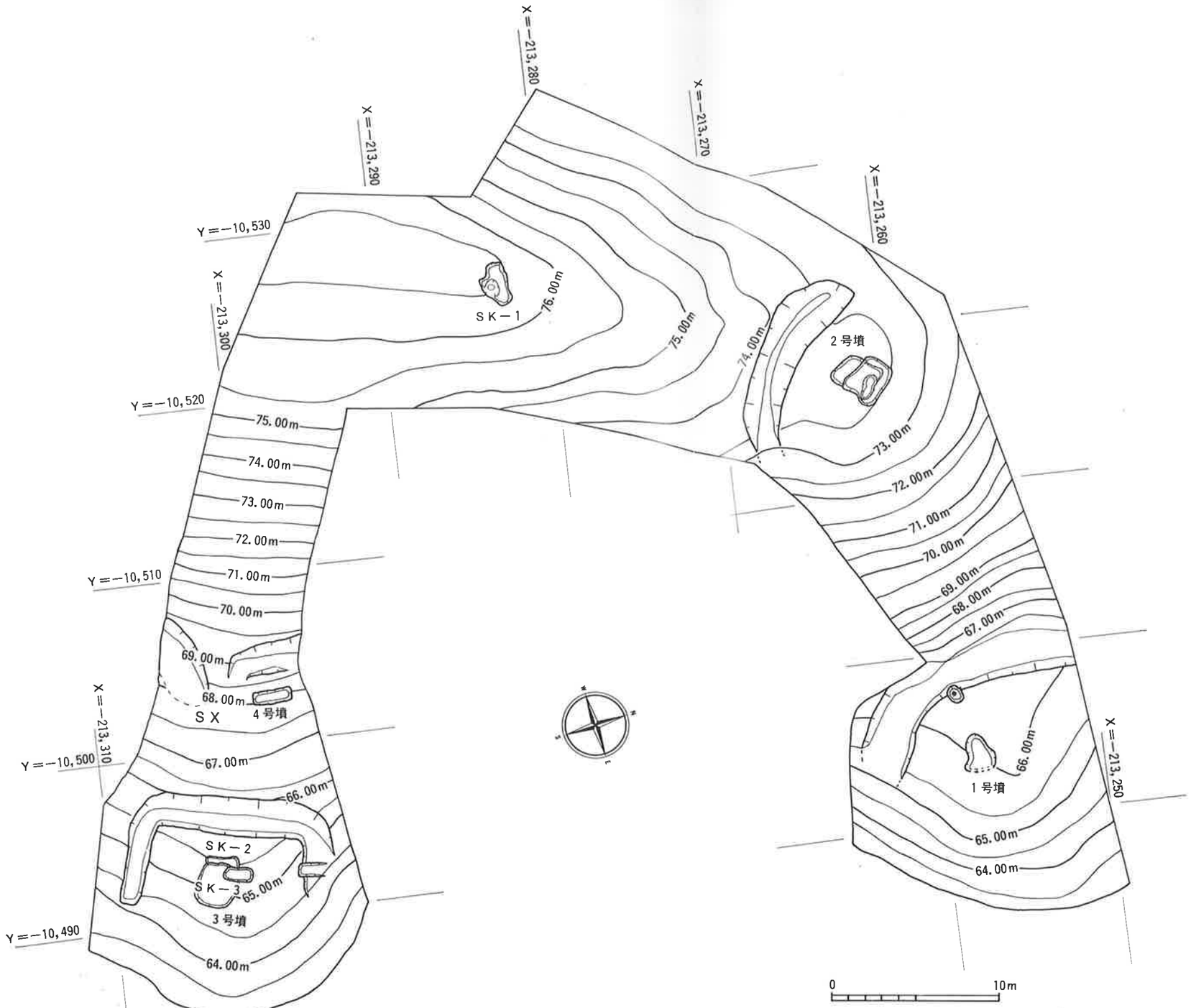
周東町高森駅の北西山麓にある北
その床面の残存状況から木棺を使
須恵器、鉄刀、刀子・鉄鏃や馬具、

場となり、その後弥生時代から古墳
わかるのである。

の推進を図ってきた。今回の文化体
夏に基礎工事に入ることとなった。
分布調査を依頼し、県は同年７月13、
らかじめ山野を伐採し、重機による
器・土師器片を含む円形土壙および
に遺跡が内包されていることがわか

の依頼を受けて８月７日から実施し





第３図　遺構配置図

た。重機による表土除去の後に淡褐色の花崗岩バイラン土があらわれ、この面に沿って人力で遺構検出を試みた。遺構を完全に検出した後、掘り込みに移りその形状を記録するために実測、写真撮影等を行なって現地での調査を終了した。なお、調査面積は800㎡である。

また、先の分布調査の際に、この丘陵の北東側の先端部にも中世の土師器が多数出土したが、標高が基礎工事によって削られる63ｍ以上に充たないため、調査区からは除外された。

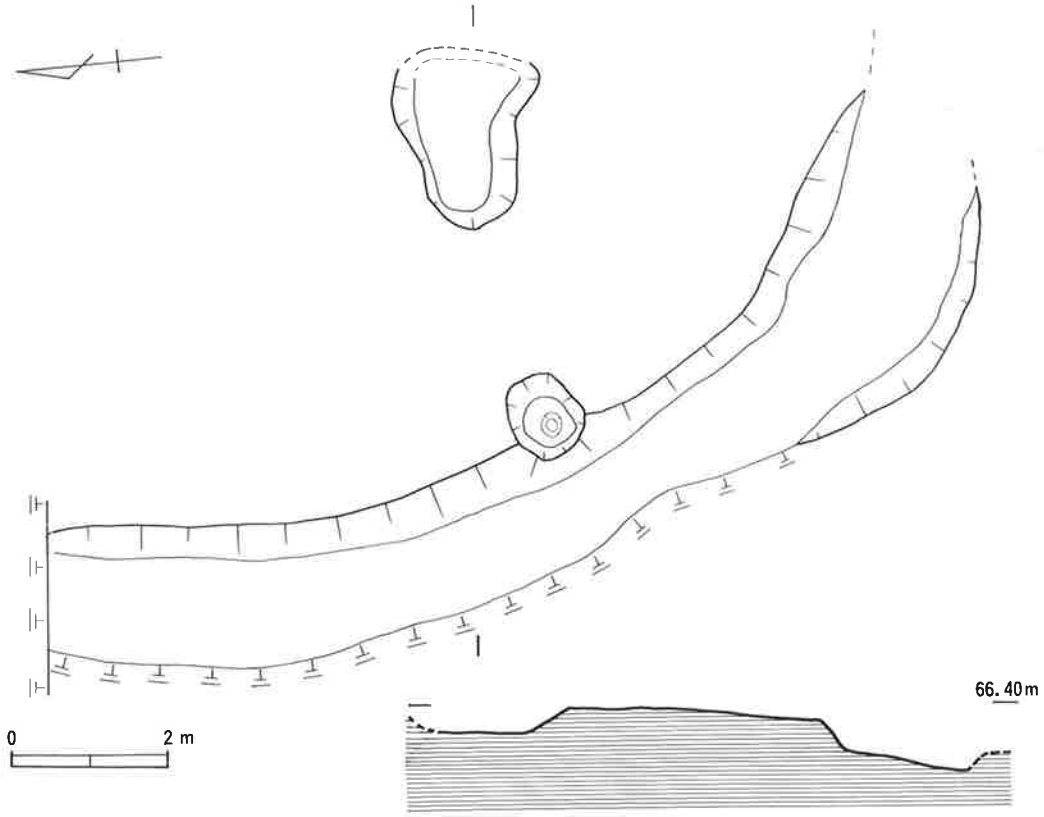
Ⅲ　調査の成果

今回の調査で確認された遺構は、古墳時代中期の方形台状墓４基と、弥生時代後期の土壙１基、それに時代不明の土壙２基と、段状遺構１基である。これらの遺構は丘陵の頂上部およびそれに連なる傾斜面を利用して造られたものであるが、後世の流失または削平を受けて残存状況は良好ではなかった。しかしながら県内の調査例でも数少ない台状墓を確認し、また、把手付椀をはじめとする貴重な遺物の出土をみた。以下、遺構ごとにその概要を述べる。

１．１号墳

１）遺構（第４図）

調査区の北端部で検出された。丘陵の斜面を人工的にカットして造られている。主体部は東側が削平されているが、不整長円形を呈していたものと考えられる。墓壙の長さ2.0ｍ（現存



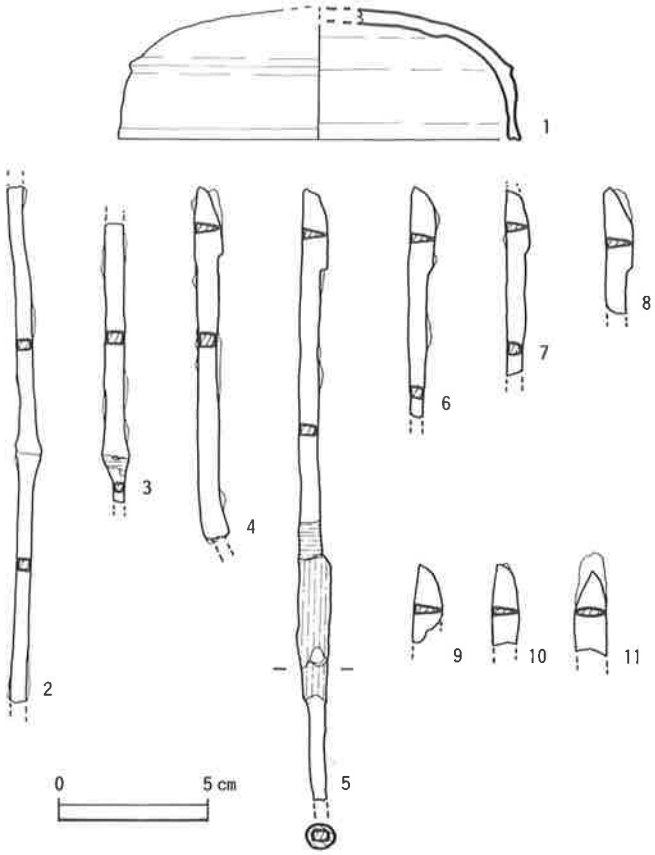
第４図　１号墳実測図

値)、幅1.6m、深さ56cmを測る。この主体部からは鉄鏃10数点が出土した。

周溝は斜面高位側に残存し、最大幅約2.5m、深さ31cmを測る。南北がいずれも削平されて一辺の長さは不明である。ただ周溝の幅から考えると相当の規模をもった遺構であることが推測されよう。また内辺に切り合うかたちで柱穴状遺構が確認された。

2）出土遺物（第5図）

1は須恵器の杯蓋である。周溝の一部から出土した。外面は暗灰色、内面は灰色を呈し、体部から急激に屈曲して口縁部に至り、わずかに外反する。天井部は内外面とも回転ヘラ削り、体部・口縁部とも回転ナデを施す。天井部と体部との境に、鋭い稜をなす。



第5図　1号墳出土遺物実測図

2から11までは鉄鏃である。主体部の埋土から出土した。2、3は鏃身部を欠損する。4～10は鏃身部が片刃箭式、11は三角形式のものである。このうち残存状態が最も良好なものは5である。5は蓖被を有し、沓巻の残りも良い。全長20.2cm（現存値)、身の長さ2.6cm、身幅0.9cm、厚さ0.4cmを測る。

2．2号墳

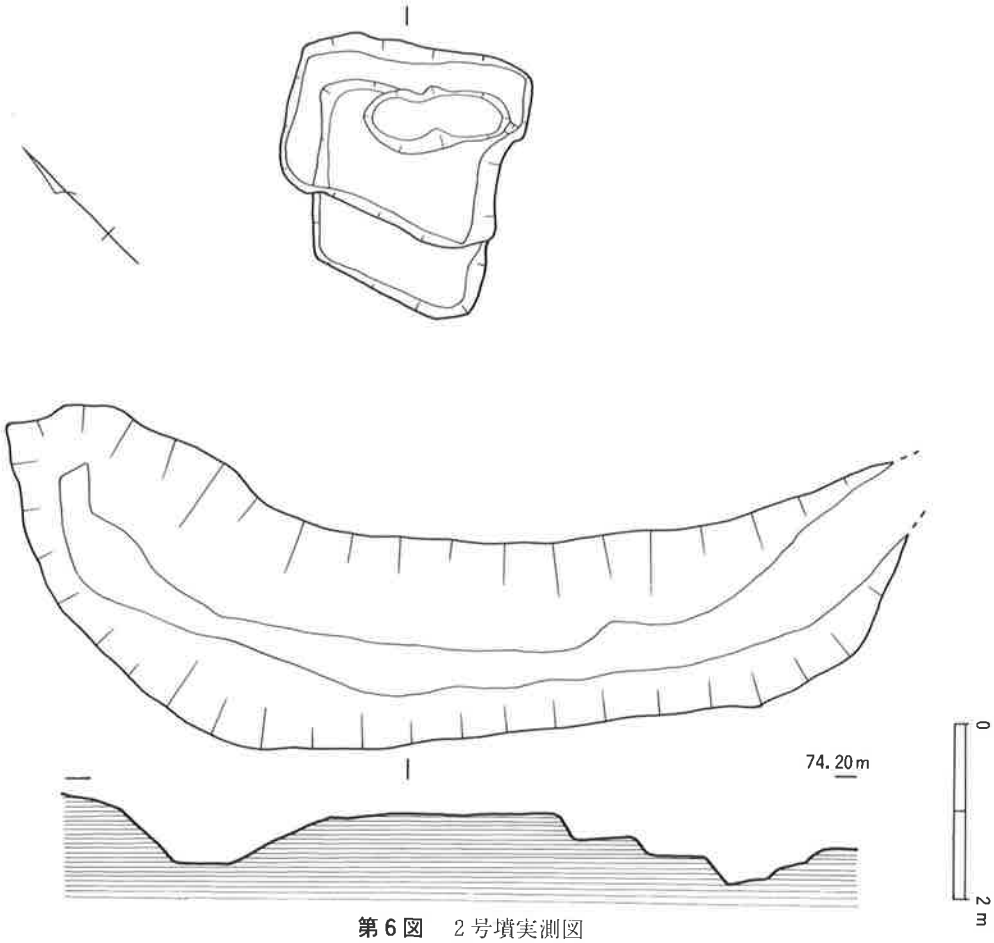
1）遺構（第6図）

1号墳のすぐ上方の頂上部に近い平坦面から検出された。主体部と見られる土壙は複数の切り合いがあるが、本来の主体部は2段掘りの土壙であろう。二段目の掘り方は1.7×0.7m、深さ33cmの不整長円形を呈す。

周溝は最大幅2.9m、深さ66cmを測る。周溝の北端部は完結しており、本来、斜面高位測のみ巡らしていたものと推定される。

2）出土遺物（第7図）

周溝内から土師器数点が出土した。



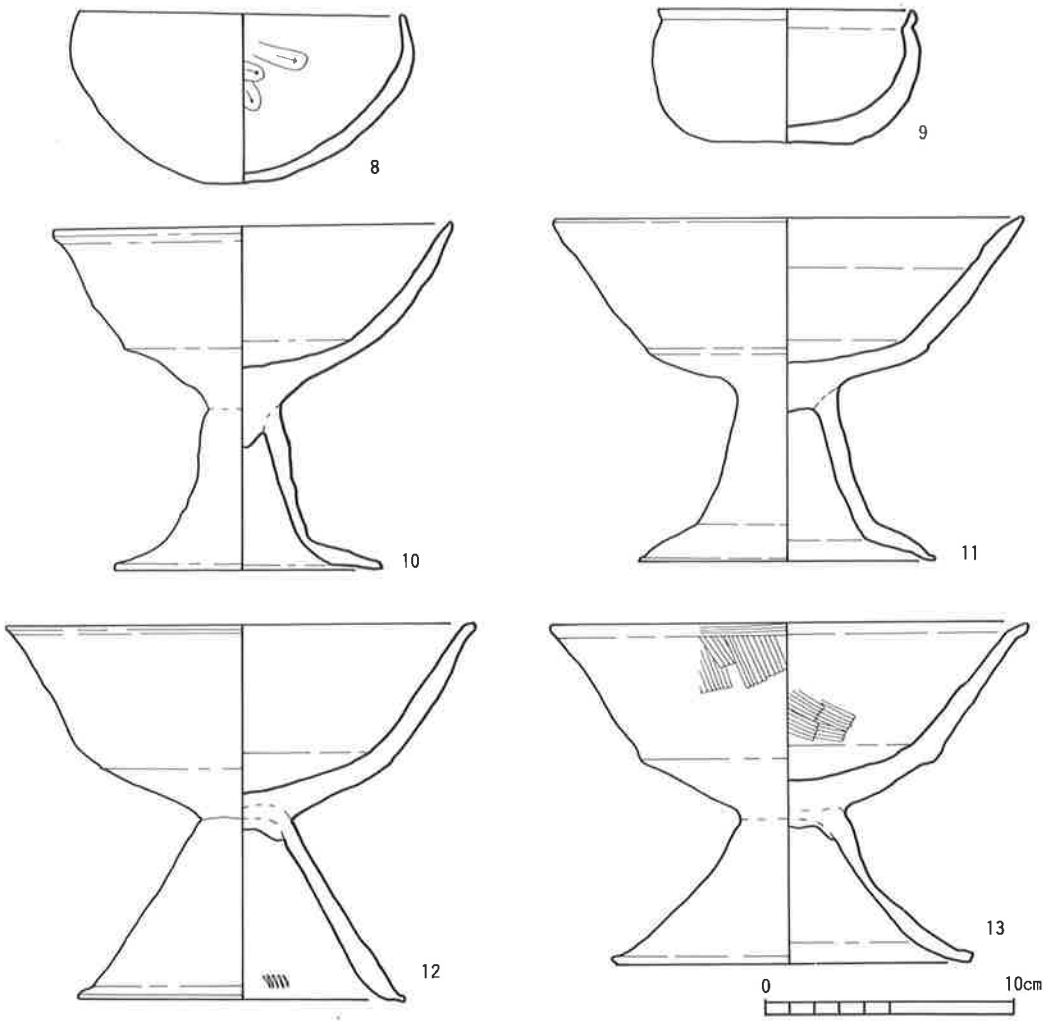
第6図　2号墳実測図

8は鉢である。淡い橙褐色を呈し、丸底からゆるやかに内彎しながら立ち上がり、口縁部付近でさらに内彎する。外面はナデを施し、内面は若干のヘラ磨きの跡が残る。9も鉢である。淡い橙褐色を呈し、平坦な底部から屈曲して立ち上がり口縁部に至る。口縁部ではわずかに内彎の後、くの字形を描いて短く外反する。内外面とも器面の剝落が著しく調整は不明である。

10～13は高杯である。一様に杯部の下半に稜をもち、内外面ともに丹が塗られている。

10は暗橙色を呈し、口径15.8cm、器高14.7cmを測る。脚部の裾は屈折して大きく開く。脚部外面は指による押圧、内面はヨコナデ調整が見られる。11は口径18.8cm、器高13.7cmを測り、橙褐色を呈する。これも脚部の裾は屈折して開き、杯部下位に明確な稜をもつ。

12の高杯は口径18.8cm、器高15.0cmを測る。橙褐色を呈し、外面は杯部、脚部ともにヘラ磨きを施す。脚部は他に比べて直線的に開く。脚部内面に一部ハケ目が見られ、杯部内面は摩耗して調整は不明である。13は口径19.0cm、器高13.6cmを測り、淡褐色を呈す。杯部外面にハケ目を有し、脚部外面は指による押圧の後、磨きが施される。脚部内面はヘラ削りの跡がうかがえる。



第７図　２号墳出土遺物実測図

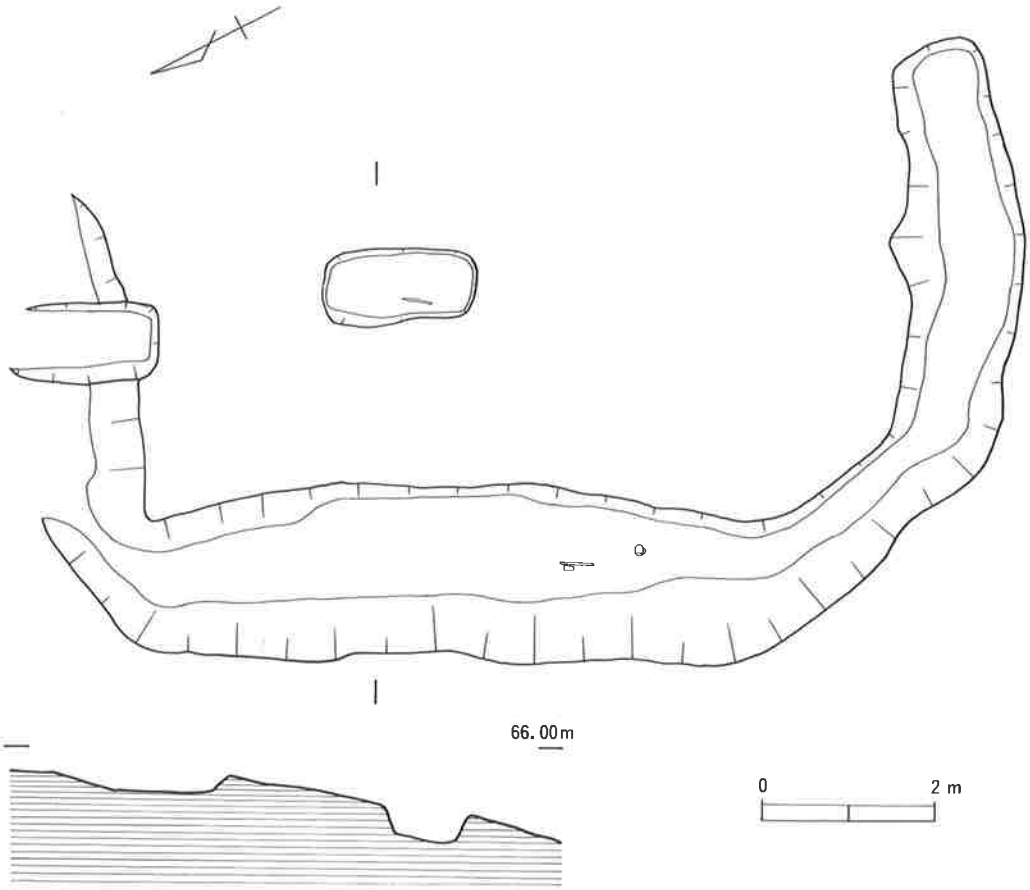
３．３号墳

１）遺構（第８図）

調査区の南東側で検出された。主体部は隅丸長方形を呈した土壙で、長さ1.8ｍ、幅86㎝、深さ37㎝を測る。弥生時代の土壙と重複し、これを切る。長軸に平行して西壁寄りに鉄剣が出土した。周溝は方形に三方に巡り、長辺およそ8.1ｍ、短辺5.9ｍ、深さ25㎝を測る。西辺の周溝内中央部付近より把手付椀、鉇、鉄斧出土。なお北辺部に主体部と同一方向で隅丸長方形状の土壙が検出されたが、これはこの墳墓に追葬されたものと考えられる。長さ推定1.8ｍ、幅92㎝、深さ50㎝を測る。

２）出土遺物（第９図）

この墳墓からはさまざまな遺物が出土した。16は把手付椀である。周溝部西辺から出土した。黒灰色を呈し、器高9.6㎝、口径11.1㎝、底径7.1㎝を測る。底部外面にはヘラ切りの後指による押圧が見られる。底部から急激に立ち上がり、口縁部付近でやや直立気味になるが、口縁端



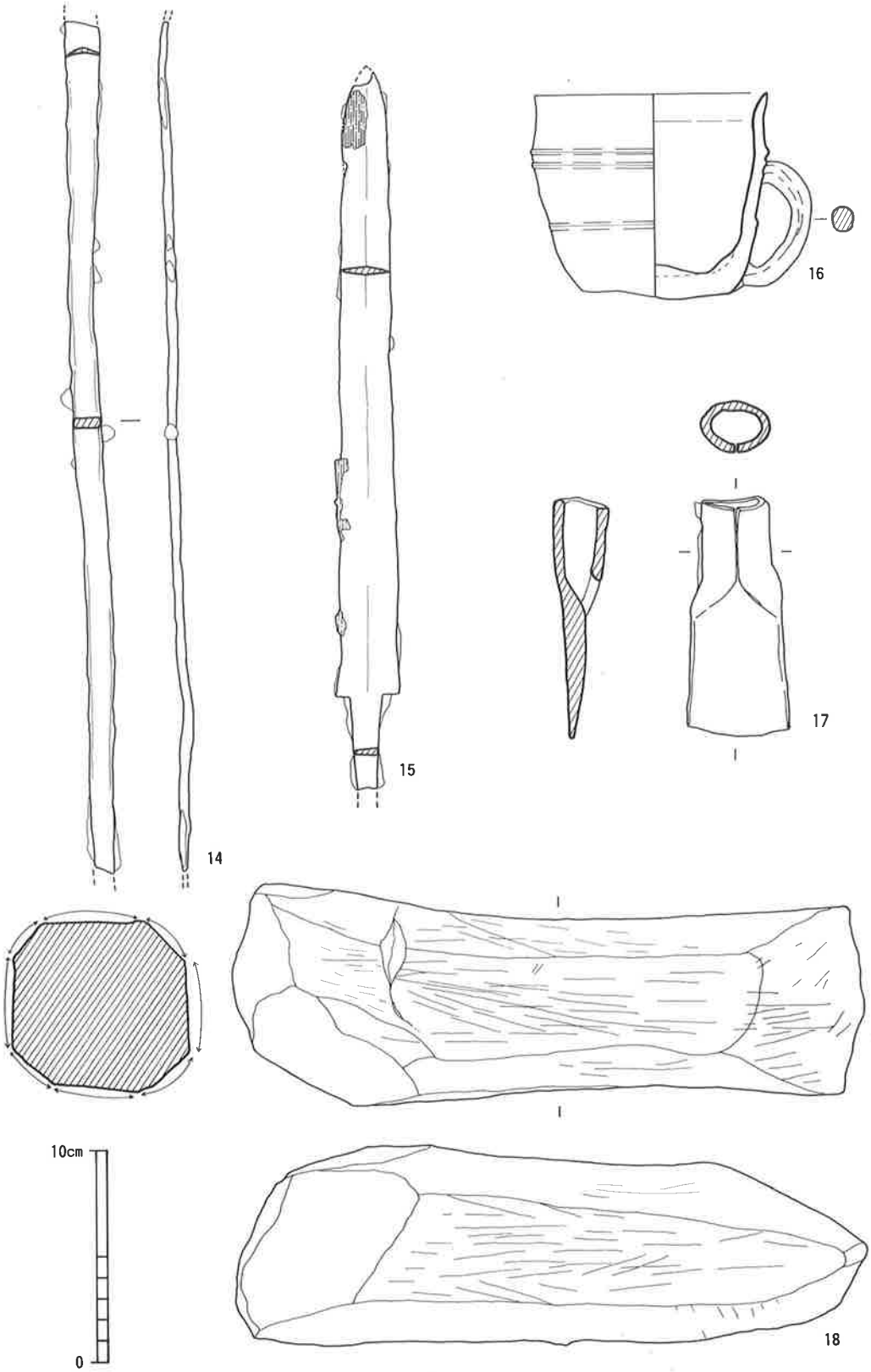
第8図　3号墳実測図

部でわずかに外反する。器面全体に焼成の際の火膨れが見られる。体部にはすべて回転ナデが施されている。このようなジョッキ形をした須恵質の土器は県内でも初めての出土であり、その形態からして長崎県上県郡峰町の恵比須山遺跡出土のジョッキ形土器にきわめて類似している。これと同類の陶質土器である可能性が考えられる。

14は鉈である。これも周溝部西辺、先の把手付椀のすぐ近くで17の鉄斧とともに出土した。14は刃部側辺を下方に彎曲させており、断面形は三日月形である。茎部の断面形は長方形をなす。現存長40.4cm、刃部現存長2.0cm、刃部幅1.7cm、茎部幅1.2cm、茎部厚さ0.4cmを測る。

17の鉄斧はほぼ完形である。全長11.1cm、幅4.9cm、身の厚さ1.1cmを測る。15は主体部から出土した鉄剣である。刃部の先端と茎部の一部を欠損する。現存長34.1cm、刃部幅3.1cm、茎部幅1.3cm、刃部の厚さ0.4cm、茎部の厚さ0.3cmを測り、刃部の一部に木質が残存する。18は周溝西側から出土した砂岩質の砥石である。全面を使用しており、表面は滑らかで各所に擦痕がある。

4．4号墳（第10図）



第9図　3号墳出土遺物実測図

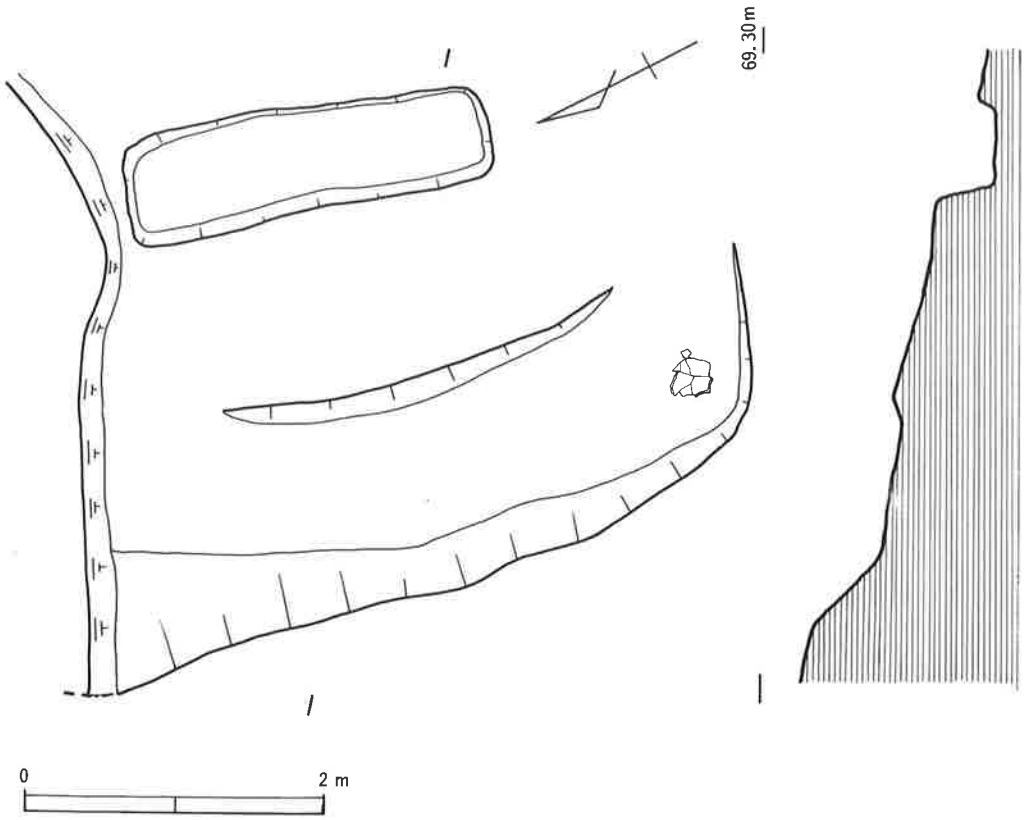
3号墳のすぐ西側の斜面から検出された。主体部は隅丸長方形を呈する土壙で、長さ2.48m、幅74cm、深さ42cm。周溝は一部が残存しているだけで、大半は調査区外、もしくは後世の削平を受けている。周溝のコーナーから須恵器の甕の一部が出土した。

5．その他の遺構・遺物

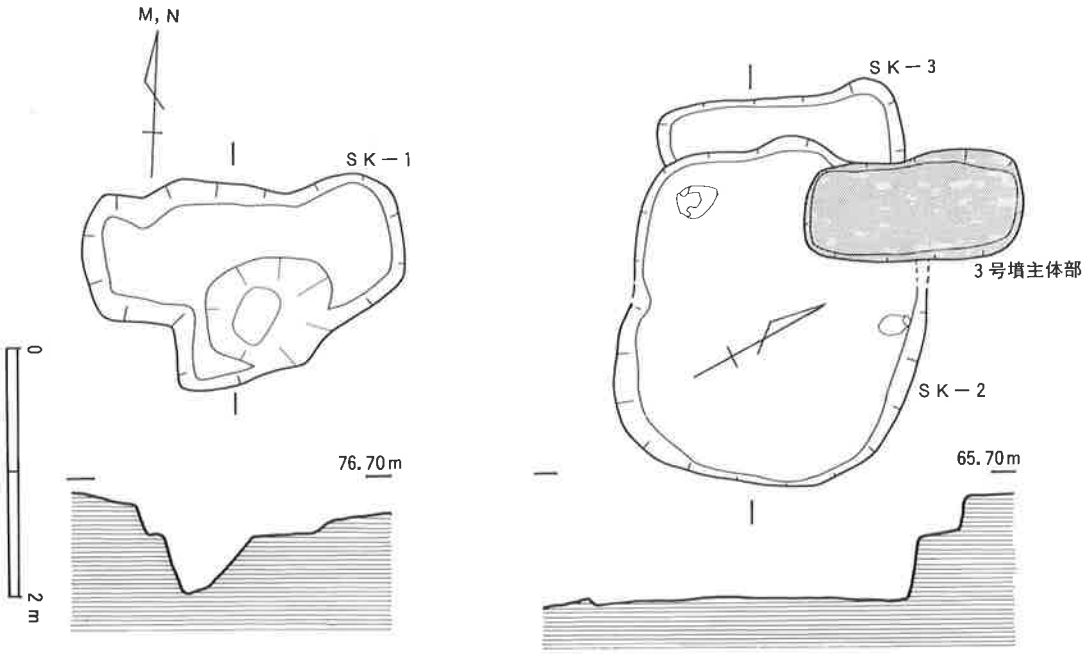
1）土壙（第11図）

SK－1　2号墳のすぐ上方の山の尾根で検出された、不整形な土壙である。長軸2.6m、短軸1.6m、深さ74cmを測る。台状墓の主体部の可能性もあるが、周溝が検出されなかったことや、出土遺物が皆無なため、その性格は不明である。

SK－2・3　3号墳主体部に切られるかたちで検出された。2が3を切る。2は隅丸長方形を呈し、長軸2.7m、短軸2.4m、深さ50cmを測る。なお3の平面形や規模は不明である。2からは弥生土器の壺と甕がひとつずつ出土した（第12図）。19は壺である。淡い橙褐色を呈し平底からなだらかに立ち上がり、胴部中央でカーブを描いて内彎しながら口縁部に至る。さらに口縁部付近で急激に屈曲し外反する。頸部外面に斜行刺突文が巡る。胴部中央にハケ目調整痕をとどめるが、他は器面が剝落して調整は不明である。20は淡黄褐色の甕である。口縁部を欠損する。底部からやや直立気味に立ち上がり、胴部上位で内彎する。器面は大部分が摩耗し



第10図　4号墳実測図

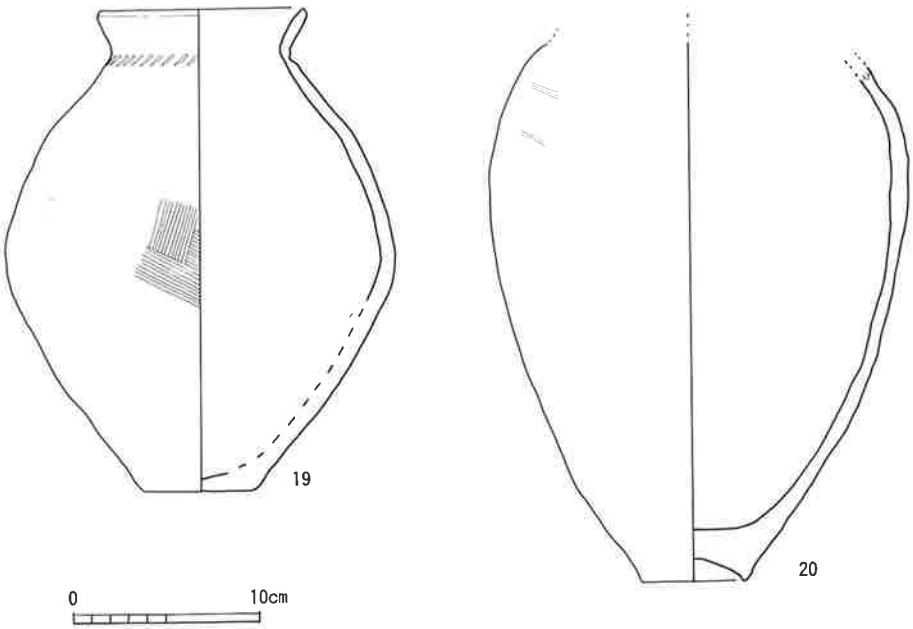


第11図　土壙実測図

て調整は不明であるが、胴部外面に若干のハケ目が残る。底部は上げ底である。これらの土器からして、ＳＫ－２は弥生時代後期に比定できるものと考えられる。

2）段状遺構

３号墳のやや西南寄りに、遺構の一部が確認された。傾斜面をおよそ60cm掘り込んで幅2.8m（推定値）の平坦面を造っている。ただし、下方は削平を受け詳細は不明である。大半が調査区外になり出土遺物もないため、いつの時代のものなのかは不明である。

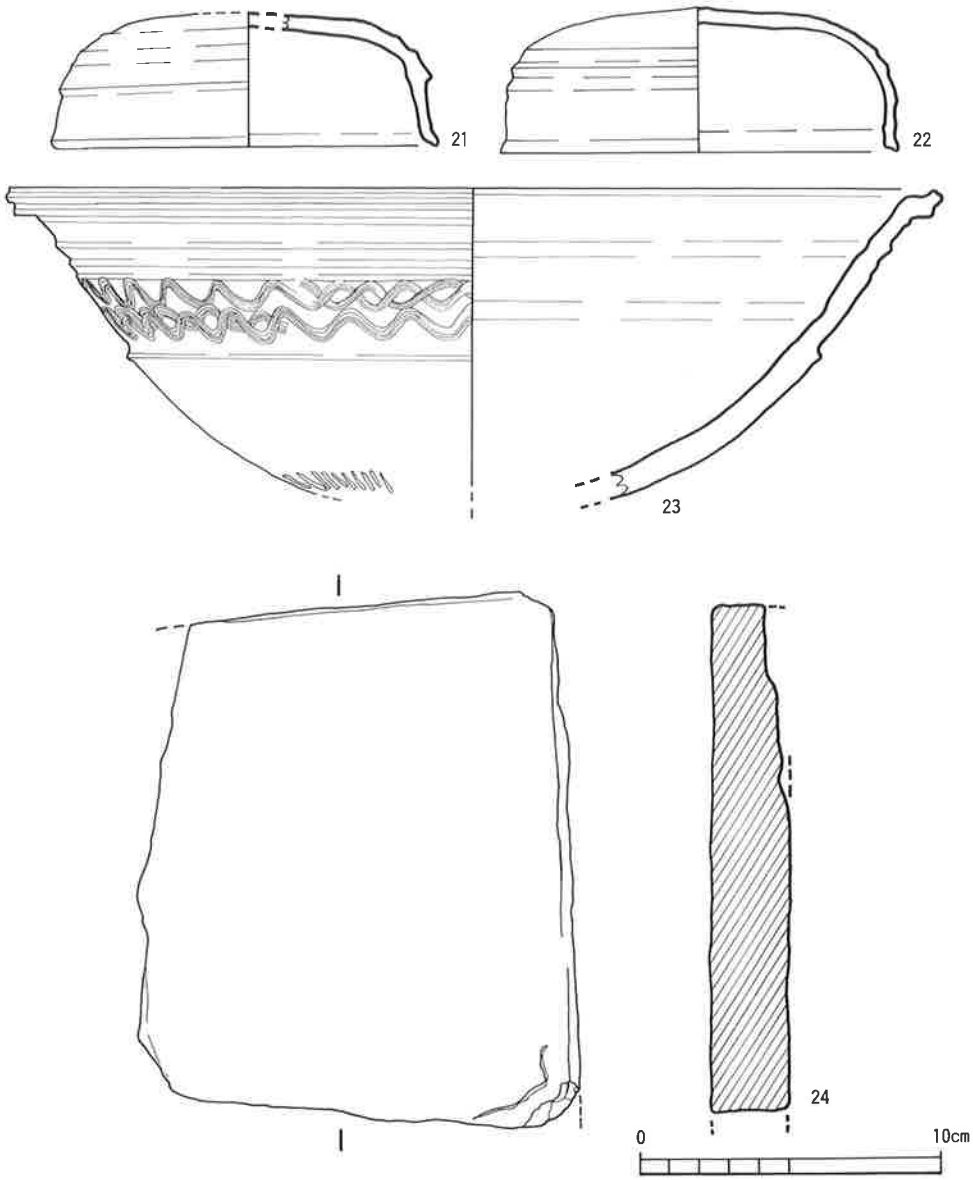


第12図　土壙出土遺物実測図

3）その他の出土遺物（第13図）

以下、遺構に伴わないかたちで出土した遺物について、その概要を述べる。

21、22は須恵器の杯蓋である。21は内面は暗灰色、外面は黒灰色を呈し天井部を欠損する。器高4.4cm（推定値）、口径12.6cmを測る。天井部からゆるやかに屈曲して体部に至るが、ここから急激に屈曲をみる。体部と口縁部の間に鋭い稜があり、口縁部は外反する。天井部は内外面ともにヘラ削りを施し、あとは回転ナデで仕上げている。22は器高4.7cm、口径13.2cmを測り、内外面ともに灰色を呈する。天井部からゆるやかに屈曲して体部に至り、体部では21同様急激に屈曲する。口縁部ではわずかに内彎気味になるが、端部において外反する。調整は21と



第13図　出土遺物実測図

同じく天井部はヘラ削り、他は回転ナデが施されている。23は同じく須恵器の器台の台部である。灰色を呈し口径30.6㎝、器高10.4㎝を測る。欠損した台部下位からゆるやかに立ち上がり口縁端部でくの字形を描いて外反する。杯部中位に波状文を、下位にタタキを施す。24は塼である。全形は不明だが、１辺16.7㎝、厚さ2.6 ㎝の方塼であると思われる。

Ⅳ まとめ

今回の調査の結果、これまで述べてきたような遺構と遺物が検出された。とりわけ方形台状墓群は合計４基確認され、県内では出土例の少ない古い様相の須恵器をはじめ、土師器群、鉄剣、鉇、鉄鏃など良好な資料を得ることができた。

さて、県内において台状墓の類例は少ない。これまでに確認された台状墓は周溝墓として報告されているものまで含めても、熊毛郡熊毛町の岡山遺跡、山口市朝田の朝田墳墓群、山口市糸米の糸米遺跡、大津郡油谷町の岡の鼻遺跡、そして豊浦郡菊川町の沖台遺跡の５箇所である。岡山遺跡では弥生時代終末期の台状墓４基が確認された。これらは複数の埋葬主体をもつ多葬墓で、台状部には成人、周溝内には小児が葬られていた。朝田墳墓群では、弥生時代終末期の台状墓13基（うち円形のもの４基、方形のもの９基)、古墳時代前期の台状墓が８基（うち円形のもの７基、方形のもの１基）確認されており、埋葬主体は箱式石棺、土壙、石蓋土壙などが用いられている。糸米遺跡では、弥生時代の周溝を伴った台状墓が１基確認された。主体部は箱式石棺である。岡の鼻遺跡の周溝墓状遺構も弥生時代終末期のもので、埋葬主体は削平されている。沖台遺跡は平成元年度調査され、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての11基にのぼる方形周溝墓群が確認された。これらの墳墓は、岡の鼻遺跡、沖台遺跡を除いて丘陵を利用して造られている。

用田古墳群もまた、玖珂盆地南西部の丘陵尾根筋先端の部分を利用して造られた台状墓群である。周溝の形態はいずれも斜面高位側に巡らされ、方形を意識したものである。主体部は１号墳を除きいずれも斜面に平行して営まれた土壙であり、単葬である。ただ、３号墳はいったん埋葬したのち北東側の周溝の内部にあらたに追葬がなされている。これらの規模は厳密には定かでないものが多いが、残りの良い３号墳は長辺8.1ｍを測り、この台状墓群の規模の一端をうかがうことができる。

３号墳の周溝から出土した把手付椀は、陶質土器の可能性がある。北部九州からはこのようなジョッキ形をした陶質土器が多く出土しているが、県内では初めての出土例である。時期的には池の上編年Ⅳ式に併行し、５世紀中葉に比定され得ると推察される。

これらの墳墓群の時期についてであるが、構築状況からみて、４号墳を含めてもそれほどの時期差があるとは考え難い。１号墳出土の須恵器の杯蓋は陶邑編年Ⅰ型式３段階に併行し、これによって５世紀の中葉に比定される。２号墳出土の土師器の高杯は５世紀後半に比定される

ものと考えられる。また表面採集された須恵器の器台は陶邑編年Ⅰ型式4段階に、杯蓋はⅠ型式3段階に併行すると考えられるところから、これら墳墓群が構築された時期は5世紀中葉～後半と見なして大過ないであろう。

県内では弥生時代後期以後、方形周溝墓あるいは方形台状墓と称されるいわゆる低墳丘墓が知られているが、こうした墓制は古墳時代にも一部で引き続いて営まれている。今回検出された4基もこのような弥生時代の墓制の延長上に位置づけられるものであり、かつ時期的にはほぼ下限を示すものといえよう。

今回の調査は、古墳時代中期の玖珂盆地南西部の墓制において貴重な資料を提供することとなった。調査区付近には同程度の標高をもった丘陵が多く、また調査中にも調査区外から須恵器の一部が発見されていることから、周囲に別の墳墓群が存在している可能性もあろう。いずれにしても、当地における古墳時代中期の状況は他に調査例がないため、きわめて希薄である。予想される別の墳墓群あるいは同時期の集落の調査を待って、今後さらに比較検討されるべき問題であろう。

〔参考文献〕

山口大学島田川遺跡学術調査団　『島田川』　瞬報社　1953
周東町史編纂委員会　『周東町史』　大村印刷　1979
田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店　1982
甘木市教育委員会　『池の上墳墓群』　甘木市文化財調査報告集第5集　1979
甘木市教育委員会　『古寺墳墓群』　甘木市文化財調査報告集第14集　1982
大阪府教育委員会　『陶邑Ⅰ』　大阪府文化財調査報告書第28集　1976
山口県教育委員会　『河池遺跡』　山口県埋蔵文化財調査報告第106集　1987
山口県教育委員会　『沖台遺跡』　山口県埋蔵文化財調査報告第128集　1990
橋口達也　「須恵器」『日本考古学協会1990年度大会研究発表要旨』1990
㈶大阪府埋蔵文化財協会　『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題―九州篇―』　1987
山口市教育委員会　『西遺跡』　山口市埋蔵文化財調査報告第21集　1986
飯塚武司　「後期古墳出土の鉄鏃について」『東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅴ』1987

山口県玖珂郡周東町埋蔵文化財調査報告第2集

用 田 古 墳 群

1991年 3月

編集 山口県埋蔵文化財センター
発行 周 東 町 教 育 委 員 会
印刷 瞬報社写真印刷株式会社